

五、氣付かれないおとし穴

人間の社会には、どんなに文化が進み、組織が整備されても、非合理的な出来事が跡を絶たないようだ。毎日のように、いたいけな幼児が、交通事故で幼い生命が奪われていく。附近の堀や井戸に落ちて死ぬる子供もある。ついこの間は、東京の墨田区で雷が電柱にかけてある開閉器に落ちた。ところがその中に入れてあった油が熱油になり、それを浴びて八百屋で買物をしておった数人の主婦が、重い火傷を受けたという報道があった。かたい豆をかじって歯が欠けたり、一寸滑ったはずみで、舗道上に横転して不治の傷を負ったり、ひげそりでできた傷口から、悪質の病原菌が侵入してひどい目に遭うこともある。

しかし、そういうことは、何とも訴えようのない不運ではあるが、損傷を受けた人の社会的信用とが人格とかには関わりのない出来事である。ところが、われわれの世の中には、自分の知らないうちに、何処かで誰かによって、自分の名誉とか信用に関わることが謀られたり、行なわれ

たりしていないという保証はない。それがいやしくも自分に責任がある事実に掲げたものであり、少なくともそれが粉飾や誇張でなければ己むを得ないが、自分に覚えや責任がないことを、あれこれ書かれたり囁かれたりすることは、何といつても迷惑至極であるといわなければならぬ。

世の中には勿論「誤解」ということがあり、この誤解が争いの種になることが多い。しかし誤解は悪意を伴わないものである。それでも多くの争いの原因をつくり上げるものである。ところが単なる誤解ではなく、勝手に他人を利用したり、誹謗したりすることになると、そのことのもたらす社会的害毒は、黙過できないものである。ところが悲しいことにはそういう事が意外に多いのである。もつとおおげさにいえば、自分の気付かない多くのおとし穴が、自分の身辺に用意されているのが人生というもののようにさえ思われる。このことに不断の注意を怠らないことがわれわれの「生活の知恵」というものであろう。

私の秘書という肩書の名刺をもった男が、下関や門司を中心に有力な会社に出向き、金を集めておるといふ情報があった。まさかと思いつつ直ちに下関の友人を通して調査したところ、それは残念ながら事実であった。その友人に当の本人に会ってもらって、嚴重注意の上、手持ちの名刺を全部回収し、今後再びかようなことのないよう戒めてもらった。その男の両親は香川県から下関に移住した人であるということであった。私の秘書というふれこみでこの種のことをやって

いた者はその男だけではない。東京にも関西にも何人がいた。この瞬間においても、どこかで誰かによってそうしたことが行なわれていないという保証は残念ながらも、私の署名入りの推薦状を持参して、有力会社を次々に訪問し、ある観光に関する出版物を相当の高値で売り歩いておる男があつた。勿論、その署名は偽書であつた。その男も香川県出身ということであつた。

一時、日刊新聞や週刊誌で騒がれた某土地会社の事件があつた。何でも土地の買収資金に関することで私に幹旋方を依頼し、その請託に某氏を通して私の弟に相当の金員を渡したそうだと云うような噂が、政界雀の間でまことしやかに囁かれたことがあつた。そこで念のため調査した処、この事件の主人公は、香川県出身の私の知人を通して、京阪神にある私の後援会の總會に出席し、私と会つたことがあること、そしてその知人の紹介でしばらく私の後援会の会員になつておつたことは事実であつた。ところが、当の本人はどうしたはずみからか間もなく来なくなつたということが判明した。私は後援会で四、五百人の人々と会つておるので、その人の面貌がどうしても思い出せなかつたし、どういふお話を聞いたかも覚えていなかつた。私の弟に金員を渡したといふ某氏といふのは、勿論、私にとつても私の弟にとつても全然面識のない未知の人であつた。政界のそうした噂も何時の間にか消えてしまつたが、何とも後味の悪い話である。

また、こんなこともあった。ある朝、私の小学校の同級生が私を訪ねてきた。小学校を卒業して以来、殆ど会っていないが、顔のどこかに幼い頃の面影がかすかに残っていて大変懐しく思った。この友人が近頃衛生飲料の製造販売の仕事を始め、私の助力を求めてきた。私はその友人のためにその仕事の成功を希望し、自分でできることは助力を惜しまないと答えた。但し私は政治にたずさわる身であつて、信用だけが財産であるから、その会社の役員等に名を連ねることはできない。そのことだけは嚴重に心得てもらいたいと断つておいた。その後この友人は何度か私を訪ねてきた。何でもその会社の出した手形を落とす期日が切迫したが、それを落とす工面ができないので何とか心配してもらいたいということであつた。私は仕方なく私の力でできる範囲内で何回か融通してあげた。勿論、その金は何度か期日を延ばされたが、最終的には何とか回収できた。ところが関西や九州方面で、契約に基づいて相当の金を出しその衛生飲料の販売店を引受けた方々から私に対し、その会社に対する苦情を持ち込まれた。その人々の言い分はみずから結んだ契約の否を訴えるのではなく、私が会長をしておるから安心してその会社と関係したと異口同音に言い張るのである。更に私がその会社によって何等かの利得を得ておるにちがいないと言わぬ許りの口ぶりである。私は自分の不運と浅慮を悔いつつも、その都度、私と私の友人の間柄、その会社と私との関係を釈明すると共に、その方々の言い分をそのまま私の友人に伝え

てやり、円満な話し合いで問題の解決を勧めたものである。幸に近頃はそういった事はなくなってきたが、これも割り切れない感情が心の隅に重たるく残る一件であった。

政治家と政治家に対する目が特に厳しくなった今日この頃である。その事はある意味において結構なことである。政治家と政治家に対する厳しい監視があるということは、その国のモラルの維持からいって不可欠なことである。政治家自身も十分、戒めてかからねばならないことは勿論である。しかし一般の人々も政治家と政治家に対する偏見や悪意を拭い去り、正しい認識の上に立って監視乃至は鞭撻をしてもらいたいものだ。政治家は表は派手に見えても、本当はかそけき一片の信用の上に終始戦々兢兢として渡世してある弱い存在であるからである。このことは、独り政治家ばかりのことではなく、広く薄氷を踏む思いで人生に処するすべての人に通ずる切なる願いであるといえよう。